広汎性発達障害及び知的障害のある子どもの音楽活動における リズムパターン同期の促進

○針原慶子　　村中智彦
（富山聴覚総合支援学校）　（上越教育大学　学校教育研究科）

KEY WORDS:音楽活動　リズムパターン同期　広汎性発達障害　知的障害

【目的】広汎性発達障害や知的障害のある子どもでは、音楽活動におけるリズムパターン（以下、パターン）への同期が困難といわれる(齋藤, 2005)。通常、楽曲を構成している様々なパターンでは、音符の長さが異なったり休符を含んだりすることによって、パターン同期への難易度が異なる。先行研究では、パターンの違いによって、その同期に違いが認められるかどうかを検証する研究は見当たらなかった。また、パターン同期を促す手続きの一つとして、ことば添えが考えられる。ことば添えによって、リズム形態の把握が促されたり(吉田, 1988)、発語することによって自身の発語が聴覚及び感覚手がかりとなり、手拍子によるパターン同期が促されたりするのではないかと推測される。本研究の目的は、広汎性発達障害や知的障害のある子どもを対象に、パターン課題とそれを含む楽曲課題を行い、パターンの難易度とパターン同期との関連（研究Ⅰ）、ことば添えがパターン同期を高める効果を持つか否か（研究Ⅱ）を明らかにすることである。

【対象児】小学校特別支援学級または特別支援学校小学部 1～3 学年の広汎性発達障害や知的障害児 4 名。指導開始時の実態を Table1 に示した。

Table 1　対象児の実態

対象児	性別	診断	音楽活動への取り組み	生活年齢	WISC-Ⅳの結果				
					FSIQ	VCI	PRI	WMI	PSI
A	男	PDD	楽曲のテンポに合わせて手拍子することができる。	8:04	101	93	89	103	124
B	男	PDD	音符の長さが異なる複雑なパターンになると、テンポが遅くなることがあった。	7:09	85	86	80	97	94
C	男	ダウン症	楽曲のテンポに合わせて手拍子することが難しい。	6:06	45	64	51	54	0
D	男	自閉症	指導者の身体プロンプトなしではパターンを手拍子する姿が認められなかった。	7:10	新版S-M社会生活能力検査 SA２：０７、身辺自立３：０６、移動２：０４、作業４：０５、意思交換２：００、集団参加２：０７、自立統制２：０２				

【実施場所・期間・指導体制】大学研究センタープレールーム（11.9m×11.6m）で、X 年 4～11 月の 8 か月、週 1 回、約 20 分の小集団指導を全 26 回実施した。指導者は MT1 名と ST1 名。**【指導内容】**音楽の指導の流れは、活動のルール説明、ST のパターン見本、パターン演奏（パターン課題）、楽曲に合わせてパターン演奏（楽曲課題）、合奏とした。パターン提示は、指導者が iPad（Apple 社）から録音したパターンを流し、演奏する 1 小節前で「はい、どうぞ」と言った後、対象児にパターン演奏させた。**【指導デザインと手続き】**研究ⅠとⅡで構成した。研究Ⅰでは 9 つのパターンを使用し、パターン課題と楽曲課題を設定し、パターン同期との関連を調べた。パターン課題は 9 つ、楽曲課題は 7 曲を実施した。

研究Ⅱでは操作交替デザインを用いて、BL、タンウンと歌詞条件の指導期で構成した。BL では対象児の手拍子反応の評価、パターン及び課題曲の選定、音源と課題設定、テンポと楽器を選定した。Ⅰ期ではことば添え(タンウン条件、歌詞条件)の指導を行い、Ⅱ期ではパターン同期を高めたいずれかの条件を導入した。対象児ごとにパターン課題 3～9 つ、楽曲課題 2 曲を実施した。1 セッションの課題項目は、パターン課題 4～5 つ、楽曲課題 2～3 曲を行った。**【評価】**パターン同期とはモデル刺激とテンポが合っており、各音符の長さが等しいこととした。評価は 1 小節のパターン反応で、正・誤・無反応を評価した。正・誤・無反応率は、反応の生起数÷反応の生起機会×100%で算出した。

【結果及び考察】Fig. 1 に研究Ⅰにおける対象児 A～D のパターン課題の生起比率を示した。A、B の 2 名では、パターン・キ、ク、ケの正反応は他のパターンに比べて低下する傾向が認められた。正反応はキ、ケ、クの順番で低くなった。楽曲課題においても、パターン・ク、ケを含む「ミッキーマウスマーチ」、パターン・カ、クを含む「ぞうさん」の誤反応が高まった。C、D の 2 名では、パターン、楽曲の違いによる影響は少なく、正反応に差は認められなかった。

Fig. 2 に研究Ⅱにおける対象児 B の「大きな栗の木の下で①」の正反応率を示した。タンウンと歌詞条件で、正反応が高まる傾向が認められた。この傾向はⅡ期の指導で明確になった。タンウン条件では、A、B、D の正反応が高まった。歌詞条件では、C の正反応が高まった。B では、BL に比べて歌詞条件を導入したことでパターン・サ、シとそれらを含む「大きな栗の木の下で①」において正反応が低下する傾向が認められた。研究Ⅰにおいてパターン、楽曲課題に共通して、パターン・クが最も正反応が低かった。パターン・クでは音符の長さの長い、短い符点 4 分音符♩.と 8 分音符♪が含まれることで叩くタイミングが掴めなかったと考えられる。研究Ⅱのことば添え指導では、C を除く 3 名において、タンウン条件で歌詞よりも正反条件応は高まった。「タン」「ウン」の発語は楽曲のテンポを取ることを容易にし、音符と「タン」、休符と「ウン」、それらに対応する手拍子や休む動作の対応関係の形成につながったと考えられる。

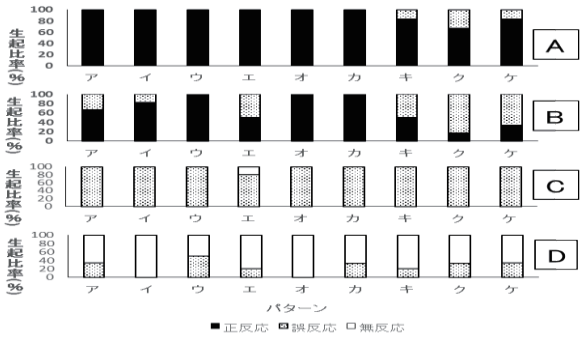

Fig. 1　A、B、C、D　パターン課題　生起比率

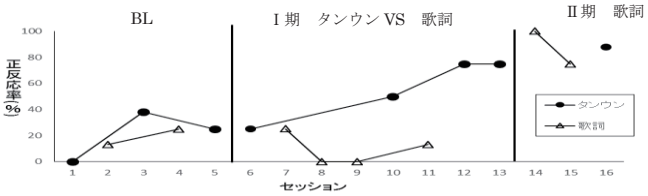

Fig. 2　B　楽曲課題　正反応率

文献

齋藤一雄（2005）特殊教育学研究，43，193-201.
吉田　豊（1988）発達障害研究，10(3)，62-71.

(HARIHARA Keiko, MURANAKA Tomohiko)